

分科会の名称 里山と文化・伝統



委員名と役割分担

分科会代表 : 藤賢三
記録係 : 田桐義啓
実行委員 : 平山喜人、福原経正

タイムテーブル

10:40~10:50 趣旨説明 加藤賢三
10:50~11:20 現代社会における景観の意味と里山保全 西野 元
11:20~11:40 地域資源の再発見とブルー・グリーンツーリズム 小川信次
11:40~12:00 里山フィールドミュージアム 島立理子
12:00~13:00 昼食、交流
13:00~13:20 安久山の里地里山と文化 平山喜人
13:20~13:40 地域社会と野生生物 小島孝夫
13:40~14:40 パネルディスカッション 「豊山のくらしと文化」
コーディネーター 西野 元

出席者数 41名

基調講演等の内容

事例発表

- (1) 現代社会における景観の意味と里山保全 西野 元 国土館大学文学部
日本の里山景観は「春の小川」、「朧月夜」など童謡中に表現されている。里山に対する感性も変わってゆく可能性もある。はたして、里山は今と同じ価値観を持って次世代に受け継がれていくのだろうか。
- (2) 地域資源の再発見とブルー・グリーンツーリズム 小川信次 (財)千葉県建設技術センター
近頃、里山、里海という言葉が使われている。これからは、花鳥風月の街づくりとともに里川という言葉を使ってゆきたい。すでに、房総の川と海を回るツアー...が始まっている。
- (3) 里山フィールドミュージアム 島立理子 千葉県立中央博物館
昨年度のフィールドミュージアムでの活動の中で、地域で育まれた伝統芸能を担う子供たちの姿に彼らの誇りを感じて感動した。観光として紹介するにはまだ時間がかかるのでは
- (4) 安久山の里地里山と文化 平山喜人 飯高の巨樹と里山物語
樹齢およそ、千年といわれているスタジイが自宅にある。周辺は安久山の里地里山、学校の元祖といわれている日蓮宗の寺の飯高檀林があり、今年は自宅をオープンガーデンとして二日間開催した。
- (5) 地域社会と野生生物 小島孝夫 成城大学文芸学部
古くから言い伝えられた民話の中に、たとえばサル・カニ合戦などの里山における生き物と人との共生の形が見えてくる。このような言い伝えの中に里山保全のためのヒントが潜んでいるのかもしれない。

討論会等の内容

「里山の暮らし」

コーディネーター 西本 元

パネラー 小川信次 島立理子 平山軍人 小島孝夫

西本：お話しいただいた内容について焦点を絞ってまとめていきたい。

先ず、「里山」とは何か、どう捉えているか。

小川：里山、里川、里海と言った広い視野から捉えたい。人と自然とのかかわり。

島立：「里山」と言う言葉は全く意識していない。人間と自然が折り合いをつける対象と考える。

平山：循環型社会の一形態。自然サイクルの輪の中に「里山」があると思う。循環型社会に復帰しないと、これからの人間社会、地球社会が成り行かないのではないか。

小島：人間は自然を必要とするが、自然は人間を必要としない。自然の中で人間はどう暮らしていくか。

西本：風景としての里山、人間が関わって出来た里山、里山の保全と言うが、これからも里山を残していけるだろうか。

小島：千葉の谷津田に「とき」を呼ぶ活動が進んでいる。

<会場からの質問>

昔式に戻したほうがよい。例えば米の収量が30%減っても経費が30%減れば±0であるが、環境改善を考えればプラスだ。

谷津田、里山を無くしてはいけない。日本人の心の古里として未来に残すべきだ。子供たちに必要な情操教育の根本に必要。

里山に限らない。里川あり、里海ありと思う。それぞれの土地の人が守るべき場所と思う。現在、例えば山や川遊びは危険と言って子供を近づけないが、方法を考えて、もっと自然の中に入って行けるように。例えば子供たちと虫取りに山に入ると新しい発見があり、身近な存在になる。

自然は怖い、と教えるだけでなく、自然の大切さを教える教育が必要と思う。

その他特筆すべき内容

「里山とは何か」から話題が広がり、「里山は残していけるのだろうか」、そして「里山を残すにはどうすればよいのか」ということが、共通の問題となってきた。童謡や昔話、体験などで、里山の暮らしが伝えられてきたのではないだろうか？

里山の四季折々のすばらしさを味わうことのできる感性は育てておかないと、里山だけが残ってもその感性が残らない事態を心配しなくていいのだろうか。そのために、何か役立つことがあるとすれば、昔からの四季を感じられる童謡などを聞かせたい。